壊れた町

大戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
壊れた町

【Ｎコード】
Ｎ０１８８Ｃ

【作者名】
大戸

【あらすじ】
ごめんなさい。まだ決めてません。

ある日の朝、男はそれを見た（前書き）

ややグロテスクな表現を含みます。苦手な方はご注意ください。

ある日の朝、男はそれを見た

戦艦島について。

明治期に海底鉱脈の採掘場として長戸港沖5キロメートルに建造された極島（通称戦艦島）の人口は、石炭資源の枯渇や国のエネルギー政策転換により昭和４０年前後から徐々に減少していった。１９７０年に炭鉱が閉山した後も島に残った人々はいたが、島自体の老朽化が問題視され、１９７４年４月２０日をもって戦艦島は住処としての役割を一度は終えた。

居住者の消滅とともに、戦艦島は地元の若者たちの巨大なテーマパークとなった。腐食した机がピラミッドのように山積みされた教室、まるで使用法の思いつかない器具であふれた診療所、巨大な石細工を思わせるアパート群……。それら全てが若者たちを魅了し、島に住み着く者まで現われた。戦艦島は再び主を取り戻したのだ。

大人の介入を完全に逃れた島内で、彼らの秩序など成立するはずもなかった。島は暴行、強姦、薬物売買など違法行為の巣窟と化し、当時戦艦島を管轄していた長戸市は１９８２年に島への渡航を全面禁止した。これまで若者たちの暴挙を傍観していた地元警察も、渡航禁止を機に一斉検挙に乗り出し、約６０名が薬物所持などの罪で逮捕された。

しかし、渡航禁止後も自前のボートなどで島に上陸する者が後を絶たず、依然として島に住み続ける集団も存在した。１９８５年７月には男子高校生１名が不良グループにリンチされ、翌月戦艦島の旧共同浴場跡にて遺体で発見されるという凄惨な事件が起こった。事態を重く見た警察は、翌１９８６年に臨時の駐在所を島に設置し、地元の村から派遣された３名の巡査が「住み込みで」居住者の排除

や上陸者の検挙に努めた。

すぐに島内での犯罪は根絶され、１９８８年9月をもって駐在所の廃止が決定、二年間島から出ることも無く職務を全うした河本、樋口、武田の3巡査は、そろってその年の警視総監賞を受賞する運びとなった。島内の治安が確保されたことにより、市は今後戦艦島を観光地として活用する方針を発表した。元島民の中には世界遺産への登録運動を始める者さえいた。三人の出身地である長戸市狭間村では、彼らの帰還前から村をあげての盛大な祝賀会が準備されていた。過疎化が進むこの海沿いの村に警官として残り、なおかつ大変な功績を挙げた三人の若者たちは、村民から半ば英雄視されているようであった。

ところが、三人の帰還が数日後に迫ったある日、地元の遊覧船業者の男が奇妙なことを言い出した。無人島化により島への定期船が廃便となり、戦艦島付近を周遊する遊覧船を運航していた彼らが駐在所への生活物資輸送を代行していた。彼らは週に一度、戦艦島の小港に船を停泊すると、所定の時間にやってくる巡査たちを一度船に招き入れ、そこで物資を手渡していた。一般人の上陸が禁止されているため、巡査たちの手を煩わせるとは思いつつも、この方法をとるしかなかったのだ。だから船員の内の誰一人として、駐在所に足を踏み入れた者はいなかった。一週間分の物資といっても、そのほとんどはレトルト食品や缶詰であり、ほとんどの場合は巡査一人の手で駐在所への運搬役は事を足りた。最初のうちは三人の巡査が週ごとに代わる代わる運搬役を担当していた。

しかし、一年目の夏を過ぎたころから樋口巡査が物資を受け取りにくることはなくなり、河本、武田の二人が交代で運搬役を勤めるようになった。船員たちは樋口が何ヶ月も姿を見せないことを少々訝しく思ったが、河本巡査は、最年長の樋口が自分たち二人をこき

使い、運搬役を押し付けているのだ、と話した。樋口の大柄な体躯と、にじみ出るような彼の威圧感を知っていた船員たちは河本の話に納得し、彼らに同情の念さえ抱いたのだった。

寒風が肉をもぎ取るように踊り狂い、戦艦島の赤黒い地面に霜柱が立つようになったある日の朝、男はそれを見た。

その日、船員たちは暖房用の灯油タンクを渡す予定であった。駐在所には灯油の備蓄が多少はあったものの、本格的な冬の到来を前にしてはあまりに心もとない量であった。タンクはかなり大型のものだったため、船員たちはあらかじめ、駐在所総出で運搬するように、と要請していた。

ところが、受け取りにやってきたのはやはり河本、武田の二人のみであった。今回も年長の樋口が二人に労務を押し付けたという。船員たちは樋口の横柄にあきれつつも、灯油タンクを二人がかりで駐在所まで運んだあとに、食料などの生活用品を取りに来るよう伝えた。戦艦島の港岸は島内への海水の侵入を防ぐためにかなり急な角度で傾斜しており、さらに港から陸地への入り口には日光の侵入までもを拒むようなうず高い堤防がそびえていた。堤防には切り立つような階段がいくつか設けられていたが、タンクの巨大なため、巡査たちはそのときに限っては堤防を回り込むように敷かれたなだらかな坂道を利用するよりほかはなかった。

船員の一人である鹿島順一は、休み休み坂を上っていく二人の背を目で追いつつ、潮風ですっかり湿気てしまったタバコに苦心しながら火を点していた。平時の受け渡しは十分と経たないうちに完了するため、鹿島が停泊中に一服するのはこれが初めてであった。彼は若く、そのためか実直すぎるところがあった。船室での喫煙は禁

止されているものの、彼以外の船員は平然と船内でタバコを吹かしていた。操縦士の山瀬にいたってはタバコを片手にハンドルを切る有様だった。そんな中でも鹿島はわざわざデッキに上がり、冷風に身を縮ませながら、火が消えないように注意して一服を始めた。

船は崩れ落ちそうな岸壁に横付けされていた。デッキからは赤黒い瓦礫が敷き詰められた港内の様相が一望され、堤防の手前には赤みを強く残したレンガ造りの高い壁が唐突に立てかけられていた。恐らく定期船の待合室の残骸だろう。だとすれば、この建物は使用されなくなってからわずか十数年余りの月日で崩壊してしまったことになる。鹿島は潮風の無慈悲を想った。

堤防の向こうに目を移すと、この島には不釣合いなほど確然とした電波塔が曇り空に伸びていた。その鉄の肌はほとんどが錆に侵食され、赤茶けていたが、容赦ない時の風に晒され削られてきたこの島においては唯一不変な存在に思われた。港内の瓦礫の海と電波塔はあからさまな対照を成していた。

電波塔の左隣には、あちこちが食い荒らされた巨大な鼠色の建造物が見えた。堤防に隠されて建物の下部は確認できないが、規則正しい窓の配列から、かつての学校ではないかと思われた。戦艦島は教育施設や日用品店、映画館などの娯楽施設まで備え、一つの町として完結したシステムを有していた。戦艦島の出身である鹿島の母によれば、人間の生活に欠かせない施設は墓場以外、完璧に揃っていたという。

墓場以外、という母の言葉に幼少期の鹿島はぼんやりとした恐怖心を抱いていた。戦艦島で人が死ぬと、そのまま海に捨てられてしまう、あるいは島の奥底には牢獄のような空間があって、病気になった人たちはそこで最後の時を過ごすのではないか……。布団の中でとりとめのない妄想をするたびに、幼い鹿島の脳裏には異界としての戦艦島のイメージが絶えず去来し、離れなかった。

しかし、成人した今思い直せば、戦艦島に墓地がないのはただ単にスペースの関係からであり――――最盛期の戦艦島の人口密度は東京特別区の9倍に達していた――――、何より島内には病院や診療所が点在し、明治期から本土以上の医療水準を誇っていたので、病人に対しては手厚い看護がなされていたという。

二人の巡査はようやく坂を上り終え、タンクを一度地面に置き、またも短い休憩を取っているようだった。すると一人の巡査が船のほうに向き直り、手を振り始めた。デッキからはその人相まで識別することはできないが、太目の体型から武田巡査だろうと、鹿島は推測した。彼はタバコを持っていた右の腕を下げ、左手を掲げて武田巡査に応えた。

と、一塊の風が鹿島の横腹を殴りつけ、地が歪曲した。

鹿島は均衡を崩し、右の手の平をデッキに滑らせると体の側面を叩きつけるように倒れこんでしまった。わき腹に鈍い痛みが広がり、すぐに消えていった。彼らにとってこれほどの突風はごく日常的なものであり、揺れが収まるのを待つと、彼は甲板の安全柵を支えにゆっくりと立ち上がった。

「大丈夫かぁ」

操縦室から気の抜けた山瀬の声が響く。鹿島は即座に無事を伝えた。

巡査たちを見やると、先程まで手を振っていた武田巡査が鹿島の方に背を向け、もう一人の河本巡査の姿は消えていた。武田はタンクから十歩ほど離れた場所に立っていた。彼の背後からは、あの切

り立った階段が港の底へと伸びでいた。彼は時折何かを覆い隠すように身をかがめ、そうかと思うと首だけ鹿島の方へ振り返り、すぐさま視線を堤防の内へと戻した。

鹿島は武田の行動を不可解に思ったが、さして気に掛ける事もなく武田の所作を漠と眺め続けた。

やがて河本巡査が坂の登頂に現われた。彼はせわしなく周囲を見回すと、甲板に鹿島の姿を認め、帽子を軽く浮かせて鹿島に会釈をしてみせた。彼らは再びタンクの両端を掴み、堤防の奥へと消えていった。鹿島はデッキ備え付けの吸殻いれにタバコを放り、船内へつづく階段に向かった。

「……エテ……」

絶え間なく吹き続ける潮風が、一瞬人の声に思える調子にまとまった。が、そのまとまりに鹿島の足を止めさせるほどの確証性はなかった。やがて彼は階段に差し掛かる。

「アアァーー……」

かぜは、ふきつづける。そして、階段はさい限なく繰り返された。一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一段降りれば、一段増え、一

段降りれば、一段増え、鹿島は叫び、かぜを吹き払おうとした、鹿島は律儀に一段づつ降りるのをやめたかった、ここから飛び降りたかった、どちらにするか迷った、その間にも一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え一段増え

「タ　ス　ケ　テ」

叫んだのは鹿島ではなかった。鹿島は弾かれたように階段を駆け上がり、甲板から堤防の上辺を嘗め回した。電波塔に目が吸い寄せられ、堤防の直線は一瞬にじんだように思われたが、彼はどうにか持ちこたえ、眼球を水平に滑らすように努めた。

平時なら島の果てまでその直線は続くはずだった。崩れることのない直線が。崩れ行く戦艦島を押し留めるように。

ところが、直線は何かに衝突し、拡散した。　彼ははじめ、それを「何か」としか認識できなかった。彼は注視しようとしたが、眼球はそれを捉え続けることをそそくさと諦め、海と島と空とをでたらめに彷徨った。やがてそれぞれの境界が曖昧になり、互いの色を侵食し始めた。最初のうちは青と緑が程よく混じり、心地よいものにさえ思えた。しかし、固まり始めた血のような色が数滴混じったかと思うと、その色は瞬く間に彼の画板を塗りつぶしてしまった。やがて、臓物をぶちまけたようなその絵画の中、彼は気づいた。「それ」があの赤黒い、瓦礫の海と同じ色であったことに。目玉のゆれは少しづつ小さくなり、血の色は薄まり、やがて一点に収束した。

それはやはり瓦礫であった。港に散らばっているものとなんら変わりのない、一塊の瓦礫であった。瓦礫は先ほどと変わらぬ水気のない声で

「タ　ス　ケ　テ」

と、叫んだ。鹿島は仔細を観察しようとしたが、いかんせん距離

が遠すぎた。それでも焦点を合わせ続けるうちに、赤黒い塊にしか見えなかった瓦礫の両側面からそれぞれ二本の棒が延びていることが認められた。片方の棒はもう片方の半分ほどの長さしかなかった。さらに、その瓦礫は上部と下部で大きさの異なるパーツから成り立っているようだった。半鐘のような形状をした下部パーツの上に、押しつぶされた楕円形の塊がのっかていた。

いつの間にか、瓦礫の背後に武田が立っていた。武田は瓦礫の片側の棒を掴むと、それを勢いよく引き上げた。瓦礫がまた叫び声をあげた。棒は瓦礫から引きちぎれていた。武田はしばしの間手の中の棒を見つめると、その滑稽さに耐えられず、吹き出してしまったようだった。

「だめじゃないか、樋口さん。勝手に出てくるなんて」

その瓦礫は、樋口さんと呼ばれていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0188c/

壊れた町

2011年1月31日04時16分発行